
魔法会でのこと。

CACAONOVEL12

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法会でのこと。

【Zコード】

Z9589Z

【作者名】

CACAO NOVEL12

【あらすじ】

ツンデレスレンダー美女、巨乳の甘えんぼ女、熱くなりやすい筋肉男、クールな氷メガネ・・・。キヤラが濃い4人の冒険ファンタジー。

短すぎだと思いますが、「了承ください」。

小さな小屋での出来事

「るるるるるん」

小さな小屋の中で、あるスレンダー美女が口笛を吹いています。

彼女の名前はステラ・M・ランジェシカ。

この国では、結構有名だつたりします。

申し遅れました。

この国は・・・異世界にあります。

しかも、ちゃつかり魔法が使えちゃいます。

この国には、魔法会という会が存在します。

魔法会では、地域の魔導士が集まり、平民の依頼をに答えて報酬を稼ぐところです。

ステラが住んでいるのはエズラント。

彼女がこれから参加するのは、エズラント魔法会。

ちなみにステラは、エズラント魔法会のエースだつたりします。

出掛けの準備が整つたようです。

彼女は、黒いピッチリした袖なしのロングスカートに身を包んでいます。

しかも、彼女の魅力的な美脚を強調するスリットが入つてゐやつ。

その下からは、また真つ黒なタイツ。

エロを全開です。

かかとの高い膝くらいまでの黒いブーツを履いています。

青く、長いロングコートを羽織り、腕にエズラントの紋章の入った腕章を付けている。

そして、ようやく出かけました。

リリイ

たつた今、酒場を通過しました。

ステラは無表情で街の住民に挨拶を返していきます。
さてさて。

この国では、魔力を持つ者と持たない者が存在します。
持つ者は魔導士として魔法会に参加し報酬を稼いで、仕事をします。
持たない者は、普通に商売をします。
しかも貴族とか存在しちゃう系です。

魔導士は貴族から平民まで、あらゆる仕事を受け、報酬を稼ぎまくるのです。

ステラはある建物に入つていきました。

そつなんです！

もの建物こそが、エズラント魔法会なのです。
コーレット州ではかなり有名な魔法会です。
他の州から、わざわざ引っ越してくるほどです。
ステラが入つてまず目に入つたのは、

「ステラ～？」

両手を大きく広げて抱きついてきた美女でした。

彼女の名前は、リリイ。

何故か、ラストネームは教えてくれないのです。
そんなことは、さておき。

リリイはボッきゅんボッきゅんです。

簡単に言つと、でつかい実が一つついてます。
胸に。

リリイはまず、ステラの急所を掴みます。

「うーん・・・

「ちょ、リ、リリイ？！

リリイは真顔で言いました。

「ちょっとだけ、おつきくなつてる」

ステラはリリイから離れました。

急所・胸を押さえて。

「べ、別に・・・そんな事気にしてない!」

ですがステラさん、顔が綻んでいますよ。

チームの方々

「ガハハはー！」

相変わらず乳繰りし合つとるのか！」「ジジくさい馬鹿笑いが聞こえます。

若い美女2人は嫌そうな顔で振り返ります。
声の主は、エズラント魔法会の頭です。

マルク・ガーライド。

白髪のちつちゅやいオッサンです。

「どうじゃ？ 儂にも1つ・・・」

言い終われませんでした。

「きやーーー！ お爺ちゃんエツチーーー！」

「頭、セクハラは許さねえぞーーー！」

ステラは自分の大鉾に手を伸ばしました。

ちなみにステラは、昨日ここに自分の武器を忘れて来ちゃったんです。

ドジですね。

「待てい！」

馬鹿でかい声です。

この馬鹿でかい声の主はマルク・ガーライド。

脳みそまで筋肉で出来てそうな馬鹿です。

「アルク！ お爺ちゃんになんとか言つてよー！ そのくらいの学習能力はあるでしょー！」

「テメエのジジイはテメエでなんとかしゃがれー！」

酷い罵声です。

実は、頭とアルクは血の繋がつた孫とお爺ちゃん関係なのです。
その為いろいろソックリです。

「じいちゃん！」

またでかい声です。
うるさいです。

「リリイのオッパ・・グフツ！」

「言わせるかああああーー！」

ステラキック炸裂です。

「私のオッパイはステラのものよ！」

何か無茶苦茶言へてます。

「知りん！ でかしりん！」

めれおはいこおじへんじとおじはんじた

重落ニノ三段ノ一。

「アリス、おまえはアーヴィングの死因を知っている？」

ステラは急に近くのテーブルで一部始終を観察していたメガネ男に話題を振りました。

従はシルネント・ジニアイタリ 通称シルニアです

ファイルは口から飲んでいたコップを下ろした。

「あ？」

「あ？ じゃない！ なんとかしろ！」

「知らん」

—あ
?「

—私のオッパイ触んないで！！

また触ってはなし！女よ！とでしゃかひ……

実際にキャラの濃いチームです。

仕事選びの時間です

さてさて。

よつやく騒ぎが静まりました。

皆揃つて、掲示板で仕事選びをしています。

「ジョーン、何かいい仕事ねえのか？」

ステラは掲示板の隣のカウンターでコップを拭いていた美女に尋ねました。

その美女はセクシーな唇をきゅっとさせて、言いました。

「あるわよ、あなたたちにピッタリの仕事」

彼女はジョーン・セルンティー。

ここに色々やつてくれる、お手伝いさんのような人です。

ジョーンは凄くスタイルがいいです。

リリィより一回り小さいとはいえ、大きい胸が目立っています。

お尻はおつきいので、ダイナマイト・ボディと言つべきでしょうか。

ジョーンは拭いていたコップを机に乗せると、一枚の紙を取り出しました。

艶やかなパープルの腰まで伸びた髪を色っぽく搔き揚げます。

ステラさんは、おでこに血管が浮いてますよー。

「この仕事なんだけど」

内容はこうです。

とある村に、怪獣が現れた。

村長の娘が拐われた。

助けてほしい。

ということです。

「ベタだな」

「ベタすぎるわ」

「ベタじゃねえか？」

「ベタ・・・か？」

おい、最後の筋肉バカ、ベタの意味わからんだろ。

「ま、怪獣は猿らしいわ。

あなたたちエズラント魔法会・最強チームなら造作もないでしょ
？」

ジエーンはにっこり微笑みます。

「報酬は6000000ルーンよ。

いいと思わない？」

ルーンというのはこの国のお金です。

1ルーン＝1円です。

「うし、アタシはいいぜ」

「私も」

「いいんじゃね？」

「引き受けた」

ジエーンはさらに美しい笑顔を見せつけました。
「じゃ、連絡しとくわ」

お仕事開始です

「おい、ヒヒで合つてんの？」

いきなり険悪な雰囲気に、ステラは確認します。

それもそうです。

でつかい門が建つてますからね。
しかも高台&兵士付きです。

ガードが堅いです。

「まさに鉄壁……」

「でもないな」

そう言つと、フィルさんはいきなり強行突破を実行しようとしてます。

「ちょっとちよつと！何してんのよ！」

もちろんリリイが止めます。

「あ？」

「あ？じゃなーい！」

よくあるパターン1です。

「おい！なんだ貴様ら！」

上から兵士Aの怒声が聞こえます。

「すいませーん！私達、エズラント魔法会の者ですがー！」

「紋章を見せる」「

リリイは手の甲を見せます。

アルクは腕を見せます。

フィルは肩を見せます。

ステラは腕章を見せます。

「腕章は怪しいが……いいだろつー通れ」

鈍い音を立てて、門が開きます。

「何かムカつくなあ……」

「まあまあ、そんな事言わないで

「ちつ」

「ぬう？！フィル、貴様今、舌打ちを…」

「つるやい連中です。

村長の家に着きました。

状況を整理しましょう

村長さんは、優しそうな人でした。

隣では、目が真っ赤になつた奥様がいます。

「ああ、本当に来てくれましたか・・・」

「ありがとうございます、ありがとうございます・・・」

メチャクチャ歓迎されました。

リリィは冷静です。

「で、お話を聞かせてもらませんか?」

ステラがイライラしていたので、空気を読んだだけですが。

「お聞きになつたのでしょうか・・・」

私達の娘・・・メアリーは、花摘みの途中に猿に・・・
「モンスター魔物に襲われたのです」

奥様も村長も、嘆いています。

ですが。

3人は、同じことを考えていました。

ベタ。

うん、ベタだね。

またですが。

筋肉馬鹿・アルクは、

「悲しいでしょー! 我々がメアリー様を救い出してみせましょー!」

!」

カツコよく言いました。

またまたですが。

村長夫妻は。

「家の娘の名前を軽々しく呼ぶな!」

「メアリーって呼んでいいのは私達だけよ!」

先ほどの嘆きは何処吹くがぜ。

アルクを罵り始めました。

さすがの彼も、たじろきまくつています。

「い」安心ください！私達が娘さんを助け出して差し上げましょう」
リリイが助け舟をだします。

村長夫妻はまた嘆きました。

「ああ、どうかお願い致します・・・」

「何だ「イツら・・・」

「しつ！そんなこと言わないの！」

本当に大丈夫でしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9589z/>

魔法会のこと。

2012年1月12日20時49分発行